

日・タイ事例村落における

村落統合様式の比較考察

酒井 出

一、本報告で主として対象とした事例村のうち、日本のそれは、富山県東砺波郡平村大島地区である。この事例村を含む平村は、秘境として著名な五箇山の一山村である。一方、タイ国の事例村は、同国ルーアニ県ブールア郡ノン・ボア村ノーン・スーア・クラン区である。この事例村が所在するルーアニ県は、同国でも最も遅れて開発が進められた東北タイでも農作物の商品化率が最も低いいわば後進県である。これら日本とタイ国の両事例村を選択した主な理由は、相対的に近代化が遅れ、伝統的生活様式を比較的多く残しているとみられることによるものである。

二、昭和三十年頃迄の大島地区においては、主として養蚕豪農重立衆（オヤッサマ）の宰領により氏神祭や、多様な真宗講や各種「村行事」が実施されていた。その際、「家」を構成員とする村落組織（部落会）を支配的集団とし、青年団、婦人会等の地区内集団を従属的集団群とする多様な地区内集団相互間の全体的協力機構がこれら「村行事」の実施に大きな機能的意味を持っていた。高度経済成長期以後においても辺地、豪雪、及び過疎対策等の指定をうけながらも、

却ってそれらの財政的援助によって村落単位の開田工事（桑畠の水田化）が進められ、それにともなう新しい用水共同組織の形成等、新しい村落の組織的統合がすすめられた。このような事態の推移に従つて、ほぼ昭和三十年代前半までに旧重立衆支配体制が解体し、これに代わって開田工事を請け負つた地区内建設業主層の地位向上→新重立衆の形成→地区内階層構造の再編成といった過程を経て、新しい水の共同組織の形成を含む新しい村落統合様式が形成された。

三、一方 タイの事例村においては、約百年前に近傍の母村から草分け一族が移住し、開墾を進め、新しい村作りがなされた。この事例村における最初の区長は、仏教寺院建立の主な推進者であったが、そのような宗教的権威性を背景としたリーダーシップの所有者でもあった。また村民は總てチャオ・ボー（村民全体の守護神）信仰の規範も共有していた。かくしてこのような宗教的契機を中心とする村落結合の原初的形態が形成されていた。更にその後において多様な他村からの移住者との濃密な村落範囲の親族関係が形成され、それと係わる親族相互の各種協力関係（小規模作業の相互的協力）と、村落レベルの相互的協力（比較的大きな作業）組織が幾分非定型的ながら形成され、村落範囲の統合を強化していく。且下のところ、近年におけるタイ国地方行政政策の進展による事例村の新しい行政的再編成も進行中であるが、先に見た原初的統合様式はなお根強く残存している。このような統合様式は、表面的に見れば非定型的な、従つてルーズな統合のようにみうけられるが、チャオ・ボー・シートン（氏神祭）や主要な村落レベルの仏教行事への参加などの際には、かなり強い参加規制が作用している。したがつてそ

れは近隣相互間の日常生活における相互協力関係にみられる相対的な非定型性と対照的であり、いわば統合様式の二重構造を形成している。

この報告では、このような日・タイ両事例村に見られる村落統合様式の著しい差異に関する理由の考察にまで立ち入ることは出来ないが、さしあたり両者の近世段階における地方行政政策のありかたの相違にその主な理由を求めることが出来るであろう。（東洋大学）